

下田歌子——女性の「国民化」を求めて

広井多鶴子

女性の社会的成功者の先駆け

下田歌子は、歌人であるとともに、華族女学校や実践女子学園をはじめ、多くの女学校の設立・運営に当たった女子教育家であり、明治天皇の第六皇女常宮昌子内親王と第七皇女周宮房子内親王の御用掛でもあった。また、貧困階層の女子の教育や救済事業に取組んだ社会事業家でもあり、帝国婦人協会や東洋婦人会、愛国婦人会など、いくつもの婦人団体を束ね、教育事業や福祉事業に取組んだ。その傍ら、下田は歌集や教科書、家庭論など、膨大な著作を著しており、単

行本だけでも八〇冊以上にのぼる。

そのため、下田は、当時、最も著名な女性の一人だった。石川啄木は、一九〇七年、『小樽日報』に、「淡紅色のリボンを叔母さんに貰って、鼠泣ねずみなきする十二三の娘小供でさへ下田歌子の名を知らぬはなし」と書いている。だがそれゆえに、下田は世の様々な批評にさらされてきた。啄木は、先のことばに続けて、女史は「二個の怪物なり、『誤れる思想』の権化なり」と書いている。平民社の『日刊平民新聞』も、同年、「妖婦下田歌子」と題して根拠のない「スキヤンダル」記事を連載し、

同紙の最終号には、下田を「精神的に虐

殺する」とまで書いた。当時、「日本で一番多く月給をとる婦人」と報じられた下田は、平民社にとって階級の敵であるとともに、男社会の敵だったのだろう。

一方、森鷗外は、小説『青年』の中で、主人公の青年に、高島詠子（下田）は「あらゆる毀誉褒貶きよほうへんを一身に集めたことのある人」であり、「悪徳新聞のあらゆる攻撃」を受けたと語らせている。評論家の赤塚行雄は、『平民新聞』の記事を「明治のセクシャル・ハラスメント」と評したが、今の世であれば、そうとしか言い様のない執拗な「攻撃」が、今日に至るまで下田の業績や人物像を歪めてきた。このことは、日本の近代史や女性史研究にとつても残念なことだろう。

主婦が主宰する家庭の創造

さて、下田は良妻賢母教育の代表的な



▲下田歌子 (1854 - 1936)

幼名、平尾鉦(せき)は、1854(安政元)年、岐阜県岩村藩に生まれる。1971(明治4)年、満17歳で上京。翌年宮中に出仕し、約8年間、美子(はるこ)皇后に仕え、「歌子」という名を賜る。結婚により宮中を辞した後、1882年に桃天(とうよう)学校を開設。夫の病没後の1885年、華族女学校の発足と同時に幹事および教授兼学監に就任し、1907年まで22年間、華族女学校の教育を担う。その一方、1893年9月から約2年間、皇女教育に当たるために欧米各国の女子教育を視察する。1899年、私立実践女学校と女子工芸学校を設立。順心女学校(現広尾学園)、帝国婦人協会新潟支会附属裁縫伝習所(現新潟青陵学園)、愛国夜間女学校など、13校以上の設立運営にかかわる。1936年82歳で逝去。

(ひろい・たづこ)教育学・家族史
下田歌子記念女性総合研究所所長

イデオログとして知られる。良妻賢母論は、かつては儒教道徳に基づく前近代のイデオロギーと見なされ、今日では性別役割分業論として批判される。だが、当時であって、良妻賢母論は、女性の地位を上げるための新しい思想だった。

下田は、男子には外に「仕える主君」なるものがあるが、女子は結婚して主婦となると、「別に仕へる主君といふものはいないのであります」と述べ、主人Ⅱ夫による支配を否定した。そして、主婦

が担う家政は、男子の行う「国事」と異なる所ところがないとして、女性の役割の重要性を主張した。下田の良妻賢母論は、アメリカ家政学のパイオニアと言われるキャサリン・ビーチヤーと同様、一家の主が支配する「家」を、主婦が主宰する「家庭」へと転換させることで、女性の社会的地位を上げようとするドメスティック・フェミニズムだったのである。

下田はまた、主婦としての役割を果すことは女性の国民としての責務であり、社会の基盤となる家庭を形成することこ

そが国家の発展につながるという信念を抱き続けた。そのため下田は、女性が家庭という領域を踏み越えて、男性と同等の国民としての権利を求める婦人参政権運動や『青鞮』などには否定的だった。

こうしたことから、下田は「国家主義者」や「保守主義者」と評価されてきた。だが、女性が男性と同等の国民として認められない時代にあつて、下田は女性の参入を認めない男性社会との対立を回避しつつ、国家社会の基盤たる家庭を女性の領域にすることで、男性社会に女性を

国民として認めさせようとしたのである。こうした下田の構想は、婦人参政権運動とは別のもの一つとしての女性の「国民化」プロジェクトと言えるだろう。